

日本語学習上の困難点と指導のポイント

岡 崎 正 道

序

外国人留学生等の日本語学習者が、はじめて日本語に触れてから一定の運用能力を獲得するまでには、当然ながら学習上の様々な困難が発生する。すでに母国で相当の会話力や表現力を身につけている者や、日本語や日本文化を専門に研究しようとして来る者とはともかく、全くの未習もしくはそれに近い状態でスタートする学習者に対しては、綿密なシラバスデザイン（教授細目の構成）の下に教授法や教材等の決定が慎重に行われ、それに則って、より効率的な学習指導が進められなければならないことは言うまでもない。だが学習者の能力・環境その他の諸条件が絡んで、当初の企図に忠実に指導が順調に進行していくとは限らず、学習指導の諸段階において様々な問題が生じ、その都度教授者側の対応の巧拙が問われるのは避けがたいことである。豊富な経験を有する教師なら臨機応変に柔軟な対応をすることが可能であろうが、その域に達するには長い時日の修練の蓄積を要するであろう。

筆者はこれまで6年余り日本語教育に携わっているが、その間ただ一教師と数名（時に単数）の学生との教室内の授業にとどまらず、できるだけ彼らの宿所や懇親の席などに進んで顔を出し、交流に努めてきた。日本語教育という分野の性格上、教室での講義や練習を繰返すだけでは必ずしも成果を上げるのに十分ではなく、教師と学習者の授業外の接触、コミュニケーションの継続性が強く望まれるのである。

本稿は、筆者が従来教育実践においてつとに心がけ関心を払ってきた日本語学習上の問題点の諸相と、それに伴う指導のポイントについて、留学生との関わりの中で得られた貴重な経験や教訓の実例をふまえながら、考察しようとするものである。

1

留学生たちの日本語既習度を見ると、母国で数か月（時に数年）の学習歴を持ち、漢字の知識も豊富で会話力も十分といった者もあれば、ほとんど未習で来日する者も少なくない。そうしたゼロスタート者に対する日本語教育でまず必要とされるのは、彼らが日本で生活するために喫緊な事項（所謂サバイバル日本語）の指導である。その内容は多岐にわたるが、例えば数字の問題を考えてみよう。

生活の上で時刻や金額等は直ちに用いねばならない必須事項だから、数字の学習は緊急を要する。一応アラビア数字の表記は読取れるとしても、約束時間の伝達や商店での値段の問答などでどうしても日本語による数値の表現をしなくてはならず、これに苦慮する学生が意外に多い。殊に金銭の数え方については、為替相場の問題や日本の高物価等に基だ困惑している彼らにとって、我々の想像以上の困難を伴うようである。また数字の単位の区切り、桁数の表現の英語等とは異なる点をよく理解させないと、かなり後の学習が相当進んだ段階に至っても、375600といった数の正しい称呼ができない者が珍しくないという結果を生んでしまう。

時刻の表し方は割に簡単であるが、日月就中日の呼称が極めて複雑なのは、初期学習段階の難点の一つであろう。一か月の中で「～にち」という単純な言い方ができない日付けが13もあるのだから、漸く数字の呼び方（いち、に、さん、し、ご…）を覚えただけの学習者が困惑を禁じ得ないのは当然である。これらを頭から全部記憶させようとするのは無謀であり、不合理でもある。当初は「いちにち、ににち、さんにち…はちにち…にじゅうにち」という具合に発音する者がいてもあえて矯正せず、漸次指示してゆけばよいとい

うのが筆者の方針である。同様にNumeral(数詞)の問題も、個・人・枚・本・台・冊・隻・機・匹・羽・頭…と限りなくあり、これを逐一導入していたら学習者の混乱は必至である。しかも、「いち、に、さん、し…」という呼び方の他に「ひとつ、ふたつ、みっつ、よっつ…」という和式の数称が絡んでくると、もはやパニック状態に近くなる。本来数の表現は感情の入る余地が少なく、合理的に組立てられているべきものであるからして、その理解はある程度機械的に行なえる方が望ましいであろう。当面はごく基本的なもののみにとどめて無理強いせず、生活体験の深まりの中での自然な定着を促すべきである。一般的な日本語教科書で数詞がまとめて取上げられているからとて、それに拘泥する必要はないのである。

さて初学者に対するサバイバル学習指導の目的は、未知の国日本でこの後生活を営む上での必要不可欠な情報や日本語の知識を教えることだが、それとともに日本社会の特質や、彼らが日常的に接触する日本人の顕著な性向・習慣・マナーの類を最小限認識せしめることも、重要な狙いである。そしてそのことは、彼らが来日して抱く日本及び日本人に対する印象とか、あるいは生活上何に不便を感じまたどのようなことに驚き戸惑うかといった点に、教師側が常に敏感でいなければならないということにもつながる。

例えば筆者が留学生から訴えられた(必ずしも来日直後とは限らないが)問題の一つに、「日本では日本語しか通用しないのですね」というのがあった。どうやら大方の留学生の来日前の感覚では、世界に冠絶する経済大国・技術大国日本は、同時に数多の外国人が訪れかつ留学生も急増中の“国際国家”であるはずであり、してみれば少なくとも大都市では日常生活の用向きのあらかたは、英語でも一応事足りると予想されているようである。彼らの国では別に英語が公用語ではなくても、都市生活においては英語が結構通用するというケースが多い。それ故日本でも当面は英語で日用の便を足しながら徐々に日本語を習得していけばよいと考えてきた者は、まずそれが大きな見込み違いであったことに否応なく気づかされる。すなわち大学の研究室で語学の達者な教官や一部の学生と対話する時を除いて、ほとんどの日本人とのコミュニケーションは日本語でしか行い得ないという、甚だ冷厳な現実

直面するのである。その結果積極的な学生は大胆に片言の日本語でアタックするが、これに対する日本人側の「日本語お上手ですねえ」という（悪意はないにしろ）まるで誠心のない“誉め言葉”に傷つき、あるいは、日本語での応答を求めているのに「私英語はわかりません…」（これは畢竟「外国人との会話は御勘弁下さい」との意思表示に他ならない）という全然的はずれな逃げ口上に当惑し、甚だしい場合は日本人不信にさえ陥ってしまう。他方度胸の弱い学生は日本人との接触をできるだけ回避しようとし、ために極度のホームシックなどの精神症状に苛まれることにもなる。これらのことは、往々彼らが「日本ではなかなか日本人と親しくなれない」と嘆く心情とも通底していよう。事実数年日本で暮らしながら、日本人の友人ができないという切実な悩みを訴える学生は決して稀ではないし、露骨にコミュニケーションを拒絶する態度を取られたといった話も時折耳にするのである。

大陸から隔絶された列島で、永年ほぼ単一の民族が特有の共同体を形成してきたこの国の住人達の特性の中には、自分らと異なる言語・文化・習慣・伝統を持つ異国人との素直な交接を阻む要因が、確かに内在しているように思われる。必ずしもあからさまな排外・差別の感情が蔓延している社会ではなく、日本人は全体的に見れば穏健で親切心も旺盛だと留学生の多くも認めているにもかかわらず、日本人との自然でおおらかな人間関係が容易に築き得ない原因は一体どこにあるのか。日本語教師はこういった点にまで及ぶ、広い問題意識を持たねばならない。

2

ごく初歩の段階を経て日本語にある程度慣れてくると、学生達は、日本人との会話もしくは日本人同士の会話の中で頻用される表現（それも教科書や解説書等に説明が施されていないもの）が、気になり出すようである。筆者のクラスの中でも、学生達が視聴した番組や耳にした日本人の言葉使いなどについて質問をしてきたり、逆にこちらから何かに関連させてそれらを話題として提示したりすることによって、教科書的な型通りの文ではない諸口語

表現に対する理解を深める契機たらしめることが多い。もとより彼ら自身辞書を繰るなどの努力をしているが、さらに納得のゆく解説を教師に求めてくる。このような時こそ、実に日本語教育者としての鼎の軽重が問われるのである。

例えば、我々がしばしば用いる「ちょっと」という語について考察しよう。留学生が最初にこの副詞を教わる時、たいていは「夕べたくさん食べましたか」「いや、ちょっとしか食べませんでした」の如く「わずか、少量」の意味である。これだけなら大変平易な単語だが、実際にはこれとは違う意味で使われる場合の方が多く、その用法は多彩である。

- (1) 「明日いっしょに映画に行きませんか」「いいえ、明日はちょっと…」
- (2) 「お出かけですか」「ええ、ちょっとそこまで」
- (3) 「ちょっと、お客さん」
- (4) 「ねえ、ちょっと、やめてくれない」
- (5) 「岩手大学は、どう行けばいいんですか」「さあ、ちょっとわかりかねますが」
- (6) 「そういうお尋ねには、ちょっとお答えできない決まりになっているんですが」
- (7) 「それはちょっと困りましたね」
- (8) 「すみません、今ちょっと細かいのがないんですが」
- (9) 「これは、ちょっとした芸術ですよ」
- (10) 「何、ちょっとした風邪だから、大丈夫だよ」

このように様々な場面における、様々な用法が「ちょっと」にはある。各例文の解釈を施してみると、(1)は婉曲な拒否や釈明の意思表示、(2)は出かける先が特に重要ではないという意を込めて曖昧にぼかす表現、(3)は人に対する呼びかけ、(4)は当方の意思の伝達を含めての呼びかけで、「ちょっと一、待ってよ」なども「ちょっと」の部分にアクセントをおけば、「少しの時間待つことを求める」意ではなく、抗議の気持ちも含めた強い呼びかけの働きとなる。(5)は釈明の気持ちを匂わせた「…し得ない」の意、(6)は(5)にも共通する「容易に…しがたい」というニュアンスである。(7)は「はなはだ」、(8)は「あいにく」等の語で置換えることができ、また「ちょっと」を丸きり省いても文意

は通るが、これを入れることで、相手に対するこちらの感情を表せる効果がある。(9)と(10)はほぼ反対の意味で、(9)は「相当な、なかなかの」の意、(10)は「つまらない」とか「大したことはない」の含意である。

無論このような微妙な意味の違いにまで精通する留学生は極めて稀であるが、それでも彼らは日本人との対話を通じて、あるいは日本人同士の会話を聞いて、自然この種の言い方に直面することとなる。彼らの関心は時に自分の日本語のレベルに拘らず高揚することもあり、こうした際どいニュアンスに神経質なまでにこだわる者も少なからずいる。

注意を要する言葉は、他にもいろいろある。例えば「いいですよ」や「そうですね」はイントネーションの相違によって、前者は承諾と遠慮、後者は(不本意ながら)納得と疑念というふうにかなり意味が変わる。また日常会話で頻発される「すみません」は、謝罪から感謝さらには単なる呼びかけへと用法が拡大しているし、「どうも」に至っては、「どうも理解できない」「どうも不思議な気がする」「どうも申し訳ありません」等副詞の修飾語の機能にとどまらず、他の言葉が使いにくい時の手短な挨拶表現、ひいては適切な答弁をなしがたい場合の「その点につきましては、どうも…」とか不幸に対する見舞の表現「いや、この度は誠にどうも…」等々、言外に含みを持たせる日本語特有の言回しの代表的な用語ともなっている。ただ直訳的な語彙吸収のみを事としていたのでは、かかる常用語の多機能性は把握し得ないであろう。ひとえに実際の状況に即応させた形での理解と、実践的な練習の反復とを図るしかないのである。

先に例示した「いいですよ」について補足すると、その承諾と遠慮の意味合いはさしずめ英語の“All right.”と“No, thank you.”に当たると思われるが、いずれも「いい(良い, 善い)」の原義とは少しかけ離れた含蓄となっている。一方これもまた頻用される「いいですね」も、(1)「明日は朝7時集合ですよ、いいですね」(2)「来月、ハワイへ行くんですよ」「いいですね」(3)「寒いなあ、一緒に鍋料理でもどうだね」「いいですね」の三つの用法は異なっている。(1)は確認(念押し)(2)は羨望、そして(3)は応諾の機能であり、これらはDiscourseの中で初めてその意味が確定するわけである。また「いい」

の対語である「悪い」にも、恐縮や遠慮の含意がある。「いい」や「悪い」は原意をわずかに残しながらも、複雑な人間の心理の応酬に用いられるのである。

初級のレベルではいささか難解にすぎるとも言えようが、それにしても学習者の疑問はこれを氷解すべく、適切な説明に取組むのが教師の務めというものであろう。しかもこの種の問題に関心を抱く（過度に執着するのは困るが）学生の方が概して日本語習得の成果も良好であることは、筆者の実践経験（限られた範囲にはとどまるが）からも確認できる。

さて留学生達の日本語学習の過程でかなり大きな障壁となるものに、敬語（待遇表現）がある。日本古来の煩瑣な敬語の体系は崩れて、現在はいささか簡略なものになりつつあるが、逆に我々自身それがためにかえって、非日常的な敬語使用を強いられる時に思わぬ誤りを犯してしまいやすいのも確かであろう。（EX.「まだ用紙をいただいていない方は、申し出て下さい」、「この部屋は、いつでもご利用して結構ですよ」etc.）戦後の民主化の進展に伴って礼節の意識が変化してきた、その結果としての繁雑な敬語の崩壊なら筆者などは大歓迎だが、事はそう単純ではない。実際敬語文化が消滅したわけでは全くなく、むしろ身分や階級の下などに関わりなく、親疎とか改まりと打解けあるいは恩恵の授受といった諸々の関係性の中で、多様な機能を発揮するようになってきたときえ言えるかもしれない。これは言うならば、現代敬語の社交表現化である。してみればたとえ外国人といえども、日本で生活していく限りある程度は敬語について了解していなければならないという現実を、日本語教育の立場において指し示す必要があるであろう。

留学生の中にも、敬語に関心を持ち、その役割について詳しい指導を求めてくるような者が意外に多いのであるが、それはおそらく彼らが指導教官等とのコミュニケーションと、それを通しての人間関係の形成にかなり神経を使っているためであると考えられる。厄介には思いつつも、教官等との摩擦なき接触のため、やむなく習熟に努めるといったところであろう。

そも日本語では基本的な挨拶表現自体が、敬意や謙意を含んでいる場合が多い。「おはようございます」とか「よろしく願いいたします」、「おやすみ

なさい」などから始まって、教官の研究室に出入りする時の挨拶、あるいは自分が先に部屋から退出する時何と言えよいか、それも学生に対するのと教官に対するのとの異同、またこれに関連して、教官や学生が日本人同士で話す場合と外国人である自分に話しかける場合と丁寧さに違いがあるようだが、自分としてはどういうふうに応じたらよいか迷ってしまうなどといった、実に細かい点まで気に止める者もいる。日本では、往々職場等の公的な人間関係が私的生活の領域にまで介入するケースがあるとよく言われる。留学生も指導教官の家に呼ばれて、もてなしを受けるようなことがたびたびあるであろうが、そんな時、教官の夫人や子供にどう挨拶したらよいか。もし夫人の方から「主人がお世話になっています」といった挨拶をされたら、どう返答すべきか。勿論この場合、「自分の方が先生にお世話になっているのに、奥様の言い方はあべこべじゃないか」などという疑問を抱くのは全く馬鹿げていると我々は思うが、留学生の中には、真面目にこの類いの理屈を唱える者もないわけではないのである。そこでは言語表現に加えて、日本社会の常識や慣習等に関する一通りの啓蒙が求められるであろう。初学の域を越えてくれば単なる挨拶語にとどまらず、「先生、某々の参考書をお貸しいただきたいのですが」とか「大変申し訳ありませんが、来週のゼミは欠席させていただいてもよろしいでしょうか」というような、やや複雑な待遇表現を駆使しての意思伝達の方法についても、教示することが可能となるであろう。

敬語の問題にせよ、あるいはまた、会話に際して完結文を使わず「それはどうも…」とか「～はちょっとねえ…」といった言い方で互いに了解し合えるという奇妙さにせよ、将又この国の諸々の習慣・儀礼等にせよ、いずれを取っても日本人の意識や文化の特質と緊密に絡み合っている。文を末尾まで言わず、それによって「含みのある」表現たらしめるような傾向が我々には確かにあるし、完結体で言わないことで相手への気配りを示す場合も少なくない。この種の曖昧さに我々は馴れ親しんでいるが、他方母国の文化・伝統を背景として成長し、かつまた母語に裏づけられた感性を身につけている外国人留学生にとっては、日本の社会的規範とか日本人の思考や行動様式といったものが、我らの想像よりはるかに奇異なものと感じられ、重苦しくのし

かかってくるがあったとしても、決して不思議ではない。

「日本語の力はかなり上達したのだが、依然日本人とうまく対話できない」「一応のコミュニケーションはなし得るが、それでも日本人との交流が円滑にはかれない」「これまで教室で勉強した知識では、日本語の微細なニュアンスは到底理解できない」等々。筆者はかかる切実な訴えを、幾多の一それも日本語も上手で在り期間も短くない一外国人から受けてきた。日本語教育者はこれらの声に真摯に答え応ずるべく、文法や音声の指導にも劣らず、この方面の研鑽を積み重ねていかねばならないと思う。

3

初級と中上級とを問わず、多くの語彙の蓄積は不可欠の要素である。語彙が足りなければ意思表示は思うに任せないから、学習者達も自ら日々語彙の拡充にこれ努めている。だが教授者の側も、彼らの学習の諸段階に応じた適切な語彙指導を図るべきである。必要なVocabularyが欠けているばかりに本当に述べたいことを言い表わせず、互いにもどかしい思いを抱きながらやむなく英語の単語に頼ってしまうという場面を、筆者も特に個人指導(Spoken Tutorial)などでしばしば経験してきた。来日時には等しくゼロスタートを切りながら、数か月でかなり日本人との会話を味わえるようになる者とそれがほとんど覚束ない者との甚だしい格差が生れるのは、もとより諸種の要因によるが、語彙力の有無もだいたい大きなウェートを占めるように思われる。たとえAccuracy(正確さ)の点で問題を残そうとも、既得の語彙を駆使してある程度強引にでも言い切ってしまうような力も、場合によっては必要である。そこで指導の現場においては、いかなる段階でどれくらいの語彙を吸収させるべきかという話になってくる。知識量は多いほどよいとは言っても、むやみやたらに詰め込もうとすれば勢い「消化不良」の弊を惹起し、逆効果になる懸念もある。また語彙力の重要性云々とは言っても、ただ既知の単語を羅列して済ませるような話法が望ましくないのは勿論である。

さて初学者の授業においては、まず様々な絵カード等を使用して基礎的な

語句を提示する。学習者達は視覚を通して、いろいろな言葉の知識を得ていくことになる。名詞から始まり、徐々に「食べる、飲む、見る、読む、書く、聞く、買う、寝る、起きる、行く、来る…」といった基本動詞が導入され、述語及び修飾語としての形容詞（い形容詞、な形容詞＝形容動詞）へと進んで行く。即ち自他の動作・行為を説明するには動詞、事物の性質や状況を言い表すためには形容詞が不可欠だからである。このあたりの語彙学習はまだ量も少なく、かつ具体的・日常的な単語が主流なのでさほどの困難は感じずに済むと思われるが、さらに進んでやや抽象的な語句が増えてきた段階が一つのヤマ場となる。例えば、利用・研究・相談・連絡・最近・約束・招待・関係・産業・理解・労働・知識・訪問…といった語である。

言うまでもなくこういった語彙は文法・読解・会話等の学習に即応する形で着実に広げられていくべきものであり、性急にマスターしようとする焦慮は禁物である。またこの種の語彙量の拡張は、漢字力の上達と不可分の関連性を有している。非漢字圏出身の学生が、漢字の種類多彩さや字形の複雑ささらにはそれらにより形成される熟語の難解さに驚愕や恐怖感さえ抱き、而してこれが習得に大いなる不安を持つのは無理からぬことではある。表意文字自体に強い違和感や抵抗感を示すことも、了解しなければならぬかもしれない。けれども日本語教育者としての我々は、彼らのかかる当惑や慨嘆に仮に深く同情したとしても、それを理由に漢字と語彙の学習の軽減を許容すべきではないであろう。

確かにコミュニケーションの能力そのものは、漢字を無視してもある程度は上達が可能であろう。たとえ日本語の書物が読めなくても英訳があれば専門の研究にも支障はないと楽観し、以て漢字学習の努力をほとんど放棄する学生が時々見られ、また我ら教師の側もあえてそうした怠学を容認してしまう傾きがないとは言えない。しかしその場合でも、漢字は勉強せずに済ませ得るとしても、所謂漢語の習得まで怠るなら日本語力の蓄積・向上は絶対にあり得ないことを、十分に教諭しなければならぬ。日常会話中に頻繁に登場する、原因・結果・内容・責任・理由・複雑・単純・習慣・権利・義務・実際・共通・全体・部分・情報・関心・会議・興味・欠点・影響・疑問・利

益・損害・優秀・無視・歴史・政治・経済・交渉・精神・態度・成功・失敗・
適当・技術・程度・指導・調整・平凡・想像…といった語句は、日本語とし
て特別改まった難語ではない。これらの読み書きが自在にできないまでも、
せめて会話の中で使われた時にそれらを一々英単語に置き換えたりすること
なくそのまま認識でき、かつ自らも極力使用することができる程度の力をな
るべく早く付けさせることが、語彙指導上の一つのメルクマールであるとは
言えるであろう。利用=使うこと、感謝=ありがとうと思うこと、理解=わ
かること、興味=おもしろいと思うこと、上達=じょうずになること等々の
ような平易な言い換えは、ごく初期の段階ではやむを得ないが、「大人の」日
本語を会得するためには早晩これを乗り越えさせなければならない。但し漢
字の学習に極端な心理的圧迫を感じ、ひいては他の部門の学習の阻害要因に
さえなる学生も時にはいるので、無体に強制するのではなく、そうした場合は
学習量等の面で何分かの配慮を加えるべきではある。

学習者の労苦は並々ではなかろうが、あくまで彼らに対し、語彙力の蓄積・
強化が日本語の運用・理解の能力の向上のために断じて欠かせない所以をよ
く得心させることが、教師の重要な責務である。

結 び

日本語教育のプロセスの中で随時発生する諸問題に冷静かつ的確に対処す
るためには、予想される課題に対する処方箋の準備とそれを実用する心構えが
できていなくてはならない。本稿で考察したサバイバル指導や常用表現の
習得、語彙力強化の問題等は、その実例の一端である。我々教師は、これら
が特に初級から中級に至らんとする学習者の踏まねばならない眼目であるこ
とを覚知し、学生の反応にも十分に留意しながら、時に大胆にまた時に柔軟
に指導に臨んでいくことが求められるであろう。筆者自身の今後の教育実践
においても、こうした視点を見失うことがないよう一層の自戒に努めたい。

参考文献

1. 「日本語教育法」 石田敏子 1988年 大修館書店
2. 「日本語教育ハンドブック」 日本語教育学会 1990年 大修館書店
3. 日本語教育指導参考書7 「中・上級の教授法」 1980年 国立国語研究所
4. 岩波講座日本語4 「敬語の機能と敬語行動」 南不二男 1977年 岩波書店
5. 「外国人とのコミュニケーション」 J.V.ネウストプニー 1982年 岩波書店
6. 「日本語の表情」 板坂 元 1978年 講談社
7. アルク日本語教師養成講座 NAFL選書2 「漢字の教え方」 武部良明 1989年 アルク